「ワタシのハナシ」をきっかけに

実際に障がいを持って生活している当事者の話を聞くことができるのが三芳町のあいサポーター研修の特徴です。
どんなことに困っているのか、どんなことをすれば助かるのか、本人の体験を元に知ることができます。

事故で右半身不随になった
黒川 智 さん（32）

高校3年生の時にバイクで事故に遭い、高次脳機能障がいになった黒川さん。事故から目を覚ました時には右半身の感覚がなくなっていました。病院でリハビリ治療を続けた後、「三芳太陽の家」に通い、さをり織り、ミシンなどで作業療法を。そんな中、絵の得意な姉の影響で始めたのが似顔絵。今では全国各地で似顔絵コーナーを開催し、知り合った人たちを笑顔にしています。また、活動は絵だけに留まらず、自宅にある窯で陶芸にも挑戦。はにわや生き物の形の箸置きなどを作っています。「車いすで移動するので、道路の凹凸やアップダウンがあると不便です。そんなときに『大丈夫？』と声をかけて、ゆっくり車いすを押してくれると助かるし安心します」と教えてくれました。

↓黒川さんが自宅の窯で作った箸置き。生き物の複雑な形も左手だけで作れるようになるくらい、根気よくリハビリを頑張りました。

中途失聴で耳が聞こえづらくなった
菅谷 良子 さん（75）

二男を出産した頃から耳の様子がおかしいなと感じていた菅谷さん。病院にかかってみると「将来耳が聞こえなくなる」という話を受けました。聴力のあるうちに手話を覚えた方がいいと勧められ、講習会に参加。加えて、同じ悩みを持つ仲間との交流を通じて手話を覚えました。「夫はこの年齢から手話を覚えるのは無理だから、手話のできる二男が私たち夫婦の通訳をしてたんです」という菅谷さん。「夫には『おいしい』『ありがとう』などの感謝を表す手話だけ教えています。感謝の言葉しか教えなければ、感謝しかされなくていいじゃない」と笑顔で話します。とても明るい菅谷さんですが、耳が聞こえなくなるという事実を知り、塞ぎがちになったことも。「挨拶をされても聞こえずにトラブルになったこともあって。耳が聞こえなくなったことを正直に話したら、気づくように話しかけてくれるようになりました」と今は笑顔で語ってくれます。

あいサポートメッセンジャー

あいサポート運動を広めていく役割を担うメッセンジャー。障がいを知ることで、手助けの1歩を踏み出す人たちを増やしたいという想いで活動しています。「個性は色々。障がいを見るのではなく、一人ひとりを見ることを大切にしています」と話す皆さん。今後は特に子どもたちを中心にあいサポート運動を広めていきたいそうです。「同じ想いの人が増えれば、きっと誰もが住みやすい町になりますよね」と語ってくれました。

↑あいサポートメッセンジャーの皆さん

網膜の病気で中途失明になった
中林 洋子 さん（83）

事務の仕事をしていた中林さんは22歳のときに書類に書かれた数字が見づらいと感じ、病院を受診。網膜色素変性症と診断され、将来的には失明すると言われました。「4年前にほとんど見えなくなって、一人で出歩けないから出かけるときは夫と一緒。歩行訓練を勧められたこともあったんだけど、その時はまだ少し見えていたのよ。だから真面目に受講しなくて。不良生徒よね」と笑って話す中林さん。実は自身の障がいを認めたくなく、白杖をつくのが嫌いだった時期も。「京都に旅行に行ったとき、娘から『知っている人がいないんだから使ってみたら』と言われて。使ってみたらとても楽でした。自分が障がいを認めないと、人からも認めてもらえないって気づいたの」と語る中林さん。「点字ブロックの上に立ち止まっていたり、荷物が置いてあるとぶつかってしまうこともあります。もし困っている姿を見かけたら、ゆっくり肩をトントンと叩いて話しかけてくれると助かります」と話します。

先天性失聴で耳が聞こえない
西澤 英司 さん（82）

先天性失聴で生まれた西澤さん。手話が主流ではなかったころ、口の形で言葉を表現する「口話」という会話法がありました。「毎日鏡の前に立って口の形を練習していました」と手話をする西澤さん。その手話は、学校の先輩が使っているのを見て覚えました。三芳町でも平成4年に手話サークルが立ち上がり、手話ができる人が増えてきて嬉しいと話します。そんな西澤さんが生活の中で困ること。それは、電車が事故で止まったとき。放送が聞こえないため、何が起こったのか理解できません。「アクシデントのときは特に情報を手に入れにくいです。東日本大震災のときも、震源や周りの状況がわからず、どこに避難したらいいか迷いました」と話します。また、手話を使わない人とは筆談することもある西澤さん。「話し言葉の文法がわからないから、『用事、何？』などの短い単語で書いてくれると理解しやすいです」と教えてくれました。